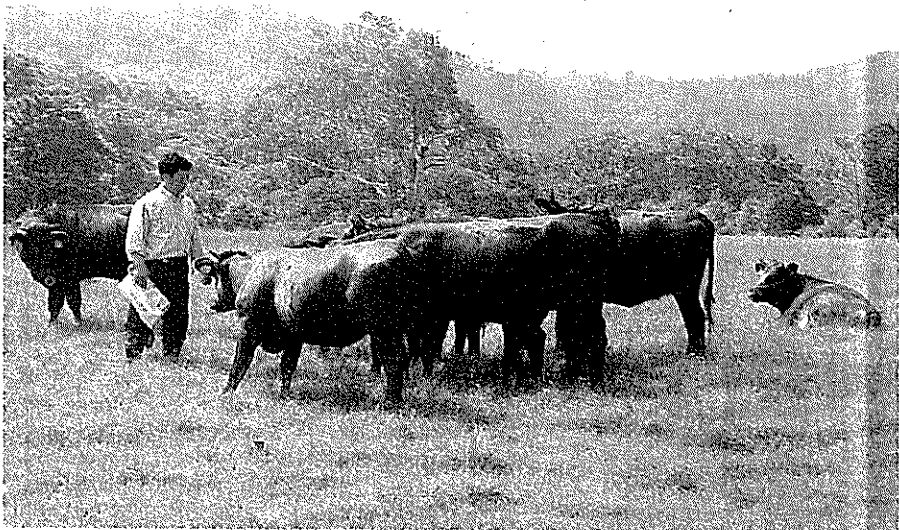


経営的にも飼料コストを抑え、肉質向上にもつながるなどのメリットがある。消費者が肉や農産物を購入して放牧を支援する仕組みを取り入れるなど、生産者と消費者が一体となった取り組みだ。

岩手

岩手県岩泉町安家（あつか）の短角牛生産者ら16人でつくる「安家森の会」は、放牧地として利用しなくなり、荒れていた132の土地を国から借り受け、短角牛を放牧。今では、草地として自然豊かな地域に再生させた。

安家森の会 放牧で荒地再生



5月から10月まで放牧されている短角牛。以前は登山客も入れない荒地だった（岩手県岩泉町の安家森で）

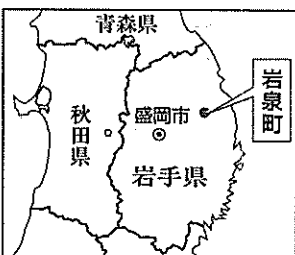
短角牛ファン味方に

短角牛は岩手県を中心に生産されている和牛の一種。安家森の会会長の合砂（あいさ）（哲夫さん）（49）は「短角牛は、子牛の親牛への愛情がとても強い、子牛のうちから親と一緒に放牧させることができる」といふ。

地域では伝統的に夏に山で放牧し、冬は牛舎に入れる「夏山冬里方式」で牛を飼っていたが、生産者の高齢化などで少なくなり、放牧地は荒れていた。会では、荒れた安家森を再生しようと、7年



「放牧した牛がササを食べてくれる」と話す合砂さん



岩泉町は東は太平洋、西は盛岡市に隣接。町としては本

州一の面積を誇る。総世帯の27%の13314戸（2005年現在）が農業に従事。牛乳やワサビ、リンゴが主産品。短角牛の生産にも力を入れている。東北農業研究センターによると「黒毛和種の牛肉に比べ疲労回復やダイエット効果のあるカルニチン成分が多く含まれる」といふ。

前から会員の肥育牛で放牧を始めた。今年も9頭を放牧している。合砂さんは16頭のう

ち、肥育牛4頭を放牧している。放牧の効果は抜群で、誰も

入ることのなかった荒地

は、ハイキングや登山に訪れる人が憩う草地に姿を交えた。牛ふんを餌にするフンコロガシやタヌキ、アナツグマ、野ウサギ、イヌワシなど動物も帰ってきた。短角牛は原生林の生育を阻害するササも好んで食べるため、森林の保全に役立っている。

経営的にも牧草を食べるため飼料コストが抑えられる。冬は牛舎で出た牛ふんを堆肥（たいひ）に利用できるなどメリットが多い。合砂さんは「新鮮な空気や太陽の光を浴びながら運動するので、肉質が良くなる。牛の生殖機能も発達し、種つきも良くなる」と強調する。

会の取り組みを支援する仕組みとしてあるのが「林間放牧サポーター」制度。年会費8000円で、地域の様子を伝える会報や牛肉、野菜などの農産物が宅配される。放牧を見学したり、安家の祭りにも参加できたりする。放牧や環境に興味を持つ消費者などからの応募が多く、現在サポーターは県内外130人になる。会費収入は放牧牛の管理費や牧柵など設備費に充てている。

会では、サポーターの数をさらに増やし、放牧面積を広げ、荒地を減らしていきたいと考えている。

エール

農業は奥深い

安家森の会サポーター・須藤一恵さん（63）
後継者不足などで危機にひんしている「放牧による短角牛生産」という岩手の大事な産業を育て、生態系を保全する取り組みを夫婦で応援しています。
現地にも足を運び、農業の奥深さや生産者の苦勞を少しずつ理解できるようになりました。



安家地大根

安家の農家20戸で生産する在来種のダイコン。ビタミンCの含有量は青首ダイコンの1.5〜2倍で、強い辛味の中にほのかな甘味がある。昨年12月、スローフード協会（本部イタリヤ）が認定する「味の箱舟」に選ばれた。1本120〜200円。

まじろ
込めて